

【概説】北海道の開拓と徳島県人

北海道と徳島の歴史的関係は古く深い。

江戸時代、阿波に隆盛した藍には北海道産の鯨ノ脂などの魚肥が不可欠であった。この輸送には蝦夷地と上方を結ぶ日本海まわりの北前船が利用され、阿波と蝦夷地の交流は緊密であった。江戸時代後期に蝦夷地の交易で活躍した高田屋嘉兵衛は、阿波藩の淡路出身である。阿波藩と嘉兵衛との関係は現在のところ不詳であるが徳島と蝦夷地との交流と無関係ではないだろう。

徳島県人で活躍をした嚆矢には、幕末の樺太探検で著名な岡本韋庵がいる。開拓使の判官として樺太開拓に従事する。蝦夷地内の開発を優先する開拓使次官黒田清隆と対立して北海道を後にしたが、後続する徳島県人の北海道移住に与えた影響ははかりしれない。

明治八年、北海道移住事業を推進した麻植郡児島村（現・川島町）の仁木竹吉は、韋庵の著「北門急務」に触発されて、北海道移住を決意し、魚肥の現地調達を目的に北海道での藍作に着手した。仁木に導かれて北海道へ移住した農民たちも道内各地に分散していくが、移住先で藍の種をまき育てた。藍作は徳島県人のよりどころであった。

明治四年、日高国静内地方に移住した稲田家臣団もまず取り組んだのは藍作であった。稲田家臣団が静内地方に移住したのは偶然ではない。明治二年、開国間もない明治政府は開拓と警護のため各藩に分領支配をおこなったが、徳島藩には日高国新冠郡の支配が命じられた。明治三年には稲田邦植に静内郡と花咲郡志古丹が割譲された。稲田家は庚午事変の処分として静内へ強制移住させられたのであるが、その背景にはこの諸藩への分領支配策があった。この六十八郡におよぶ分領は、大部分は形式的な支配にとどまり実があらなかったが、背水の陣でのぞんだ稲田家臣団の開拓事業は大きな成果をあげた。

ところで明治二十五年七月「徳島日日新聞」に、関義臣徳島県知事の徳島県民二十万人を北海道に移住させるといふ計画案が掲載されている。当時の徳島県の人口は約七十万人、その三分の一に近い膨大な数である。この破天荒にも見える移住奨励策の背景には、基幹産業であった藍業の衰退による徳島県の産業経済の停滞と不振があ

った。県内に滞留する過剰な人口を新天地北海道に殖民移住させることにより双方の発展を画策するものであった。

関知事の辞職によりこの案は直接的には実現に至らなかったが、北海道の殖民移住策は停滞のはじまった徳島県の経済や産業の打開策として取り上げられ奨励されていくのである。

明治二十四年に組織された「那賀郡北海道殖民同盟会」は、県内の有力者による殖民移住事業の代表的なものであり、安定的に北海道へ移住させるための組織活動であった。

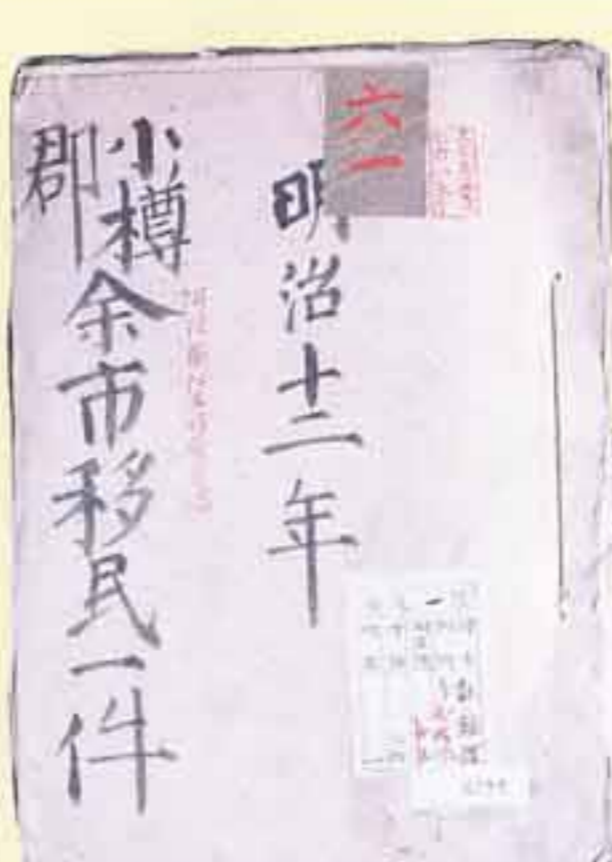
明治中期には吉野川流域の藍作地帯や、県南各地から阿波団体や徳島団体とよばれる団体移住がおこなわれたり、県人によって多数の農場が道内各地に次々と開設されていった。この結果、徳島県はもともと積極的な北海道移民県として、移住人数では全国十一番目、西日本では香川県と並んで卓越した移住県となった。（明治四十四年「殖民公報」）

概していえば、徳島県人の北海道移住は、特に開拓初期の段階において質量とも大きな役割を果たしたといえる。先述したものの以外にも、興産社をはじめ北海道における製藍事業、日本屈指の大農場となった蜂須賀農場、北海道新聞の元を築いた阿部興人や阿部宇之八をはじめ、各分野での徳島県人の奮闘ぶりには目を見張るものがある。その積極的な活動は「起業精神」に満ちており、明治初期の活力のあった時代の徳島県人の意欲的エネルギーを彷彿とさせる。

このほか、明治三十五年七十二歳の高齢で北海道開拓に乗り出した医師関寛齋や、「五反ならし運動」の中林ナカなど、新天地北海道にあらたな活躍の場をもとめた人物も多い。

また道内には、県内徳島で失われた貴重な徳島の近代史資料が残されていることも調査が進む中で明らかになって来ており、これからの解明が期待される。

この意味で北海道と徳島の移住や交流の歴史を考えることは、近現代の徳島を見直すための非常に重要な資料や視点を提供してくれるといえるだろう。



明治二年 徳島藩への新冠郡への分領支配を命ずる文書（蜂須賀家文書）

徳島藩 日高國之内 新冠郡 右郡其藩支 配、被 仰付候事 八月

いあいさし

第十七回資料紹介展は「徳島県人の北海道移住」といたしました。これは本館の開館以来、北海道より祖先のルーツを求めて来館される方々が多くいることと、本館が平成九・十年の二ヶ年間、北海道移住者関係の資料調査を行っていることによりです。

徳島県人の北海道移住は明治時代の早い頃から大正末期までに五万人もの多くの人々が移住し、全国でも先駆的役割を果たしています。この人達は雄大な心を懐に抱いて北の大地に挑戦し、成功した人もいますが、野望半ばで帰郷した人も多くいます。日夜の開拓は苦難と辛苦の連続で、大自然との戦いには個人の力よりも、集団の団結心こそが、厳寒の中で相乗作用をもたらしたことは確かです。

また、未開地の開拓にはリーダーの存在はなくてはならないもので、全員の心をまとめ、自然の猛威に勇気と決断で立向った不屈の精神と頑固なまでの強靭さは称讃されたことと思われます。今回はこのリーダー達にスポットをあてて資料展示を行っています。

さらに、北海道調査で気がついたことは、移住者達が選んだ土地の地形や風景は、徳島の故郷の村に瓜二つでありました。このことは、開拓に夢破れかけた心を、大地に向って古里を思い出しては奮起した姿を想像して感動を覚えました。

今回の展示にあたり御指導いただきました北海道移住関係資料調査委員会(委員長・平井松午 徳島大学教授)の諸先生方、展示資料を御提供いただきました徳島県立図書館をはじめとする県内諸機関、北海道立文書館をはじめとする北海道関係諸機関及び、個人所蔵者の方々に心より御礼申し上げます。

平成十一年二月二日

徳島県立文書館長 小林勝美

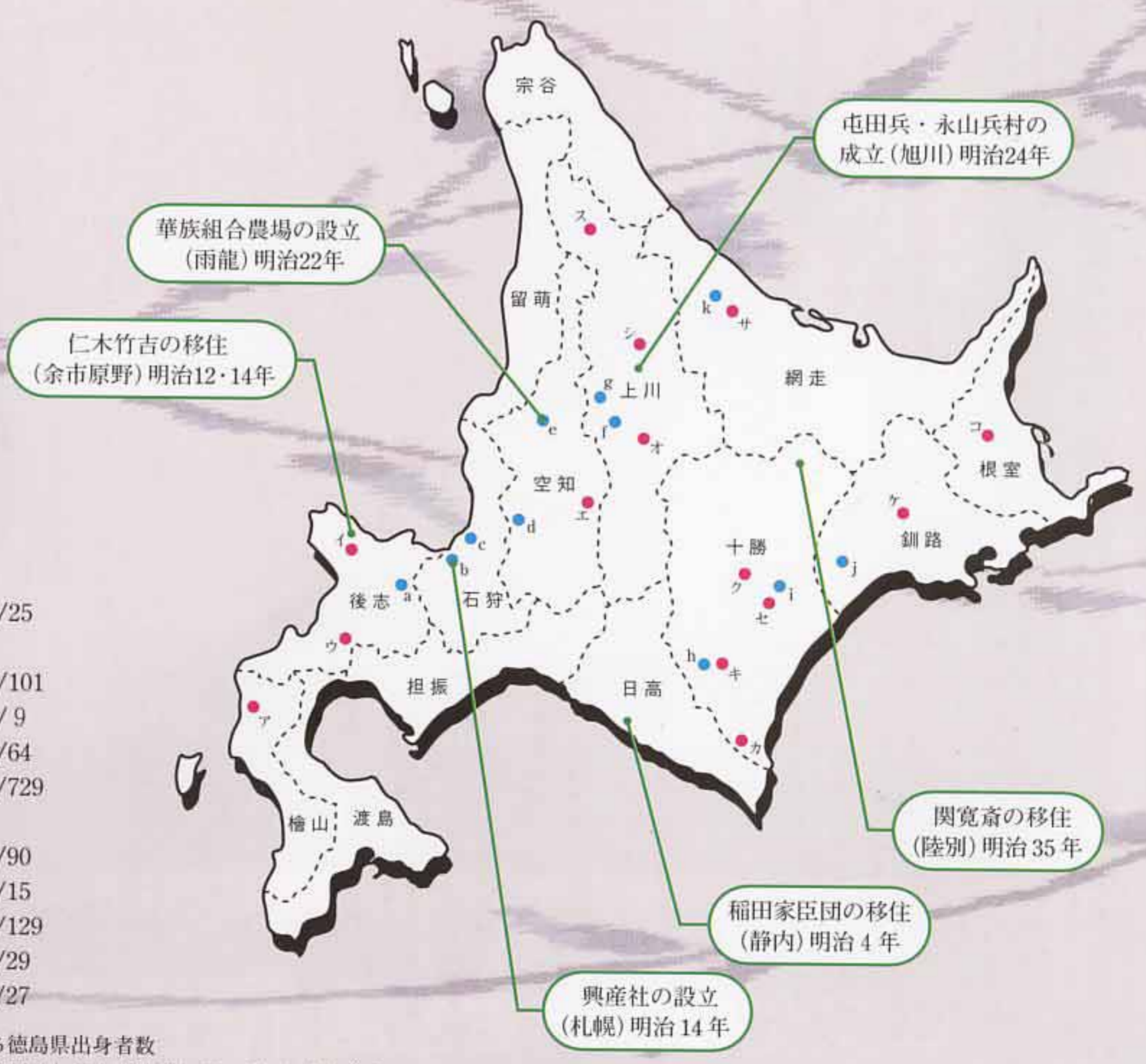
●自作団体移住

ア (徳島団体)	明治24年	70戸
イ (関井団体)	明治19年	52戸
ウ 阿波団体	明治40年	?戸
エ 阿波団体	明治40年	?戸
オ 阿波団体	明治28年	数戸
カ (徳島団体)	明治30年	31戸
キ 徳島団体	大正8年	19戸
ク 徳島団体	明治45年	?戸
ケ 徳島団体	大正4年	60戸
コ 徳島団体	明治44年	40戸
サ 余市団体	明治29年	22戸
シ 恵比須団体	明治23年	?戸
ス 徳島団体	明治36年	32戸
セ 南海社	明治25 ~29年	113戸

●小作農場

a 赤井川農場 合資会社農場	明治31年	23/25
b 谷農場 (元興産社)	明治44年 (明治15年)	67/101
c 増田農場	明治25年	2/9
d 友成農場	明治25年	44/64
e 蜂須賀農場	明治26年	74/729
f 佐坂農場	明治30年	
g 宮越農場	明治26年	32/90
h 十一農場	?	9/15
i 利別(板東)農場	明治30年	125/129
j 木村農場	明治41年	27/29
k 岩田農場	明治29年	14/27

(注) 1. 分母は農場在住者総数、分子はうち徳島県出身者数
2. 平井松午「徳島県出身北海道移民の研究」(『人文地理』38-5)により作成。



徳島県人の 北海道移住関係年表

平井松午作成

年	月	北海道・日本の動向	徳島県人の動向	徳島県人の移住	移住に関する県内の新聞記事
一六〇四(慶長9)年		松前藩の成立			
一七九九(寛政11)年	1月	幕府、東蝦夷地を直轄			
一八〇〇(寛政12)年	3月	八王子千人同心の子弟、鶴川・白糠場所に屯田			
一八〇七(文化4)年	3月	幕府、蝦夷地全島を直轄			
一八二一(文政4)年	12月	幕府、蝦夷地を松前藩に返還			
一八五五(安政2)年	3月	幕府、和人地を除く蝦夷地を直轄 箱館ほか開港			
一八六三(文久3)年	6月		岡本文平(のち監輔)、北蝦夷地(樺太)探検のため箱館出發(10月、帰箱館)		
一八六四(元治1)年	4月		岡本文平、北蝦夷地再調査、越年、日本人として初めて北蝦夷地を一周する(11月完了)		
一八六八(明治1)年	4月	明治維新、箱館戦争 箱館府の設置	岡本監輔、箱館裁判所(のち箱館府)権判事となる		
一八六九(明治2)年	4月	「元年者」ハワイ移民	岡本監輔、開拓使開拓判官となる		
	7月	開拓使の設置	徳島藩、新冠郡を割渡		
	8月	蝦夷地を北海道と改称			
一八七〇(明治3)年	2月	樺太開拓使の設置	庚午事変(稲田騒動)勃発		
	3月	士族移住の開始	岡本監輔、開拓使を依願免官となる		
	5月		稲田邦種に静内郡・花咲郡志古丹を割渡		
	10月		稲田邦種に新冠郡を割渡	稲田家臣団150余戸、静内に移住	
一八七二(明治4)年	3月	廃藩置県	稲田邦種旧臣、静内郡において葉藍の試作		
	6月	北海道の分領支配を廃し、開拓使管轄とする	稲田九郎兵衛(邦種)、新冠郡静内郡、色丹島の支配を解かれる	稲田家臣団の移住第二陣、紀州周参見沖で遭難(死者110余人)	
	8月		岡本監輔、「窮北日誌」「北門急務」を執筆		
一八七四(明治5)年	9月	北海道土地売買貸規則・地所規則を制定			
一八七四(明治7)年	10月	屯田兵制度の制定(翌年より士族屯田兵の実施)			
一八七五(明治8)年	1月	樺太・千島交換条約の締結	仁木竹吉、麻植・阿波郡長宛に「北海道渡航二付添願願」を提出		
	5月	屯田兵198戸965人、琴似村へ入地(以後、明治32年まで)	仁木竹吉来道し「北海道藍烟菽麦拡張論」を開拓使に復命		
	5月				
	12月				

北海道地名の読み方

愛冠…あいかつぶ
 咄別…いかんべつ
 有珠…うす
 雨龍…うりゆう
 蝦夷…えぞ
 渡島…おしま
 蓋派…けなしば
 色丹…しこたん
 静内…しずない
 篠路…しのろ
 後志…しりべし
 瀬棚…せたな
 空知…そらち
 十勝…とがち
 利別…としべつ
 斗満…とまむ
 新冠…にいかつぶ
 花咲…はなさき
 富良野…ふらの
 真狩…まっかり
 紋別…もんべつ
 勇足…ゆうたり
 陸別…りくべつ

移住に関する県内の新聞記事

徳島県人が新天地北海道の開拓にあたって大きなよりどころとしたものは藍作・製藍事業であった。

藍はいうまでもなく徳島の特産品であり、江戸時代から明治のはじめにかけて阿波の基幹産業として発達し産業経済を支えた。灌漑用水の必要とする米作りが道内に普及するのは、明治中期以降であり、北海道開拓初期における農業の主体は畑作農業であった。この意味では畑作農業である藍作を得意とした徳島県人にとって、藍業は北海道開拓に取り組み大きな武器であった。

藍作にはじめて取り組んだのは、庚午事変の後、日高の静内地方に移住した稲田家旧家臣団であった。明治四年、六月静内郡において葉藍が試作され、明治十二年より本格的に藍の製造に乗り出した。北海道の開拓に力を注ぐ開拓使は、殖産興業策の一環として藍業にも注目し補助金などにより支援した。

一方、岡本韋庵や稲田家の影響を受け北海道への開拓移住を画策していた仁木竹吉は、明治八年「殖民ノ儀ニ付願」を開拓使に提出した。その文中には、阿波における藍作の難澁が魚肥肥料の高騰による圧迫によるとして、練粕生産地である北海道において藍作を行うことの有利性をあげている。

明治十二年仁木竹吉は、藍作を目的に徳島県の麻植・美馬・三好の農民百七戸三百六十余人を余市原野に入植させ、翌十三年はこの地において藍作を開始した。竹吉はこの頃徳島県人の移住の手引きを行い、仁木村は徳島県人の移住センターの様相を呈していた。移住民は仁木村が手狭になると各地に転住していった。

有珠郡紋別に移住した鎌田新三郎も、藍作と藍の製造に着手し、数年たたずしてすくもの製造に成功している。

魚肥の高騰は、阿波藍に従事するものがいだく共通の難題であった。明治十二年藍商による「開拓使の撫養出張所設置の建言」も開拓使の出張所を徳島におくことで、北海道産の魚肥を安

価に安定して手にいれるための方策であったといえる。この建言は実現されなかったが、北海道に生産地を移しての藍づくりは積極的に促進されていた。

板野郡長江村(現・鳴門市大津町)出身の滝本五郎は、北海道に移住し、大農法による農場開拓を目指して明治十四年、実弟阿部興人と組んで徳島興産社を設立したが、同十八年には札幌郡篠路村の興産社農場に製造所を設けて染(すくも)の製造に乗り出し全国に出荷した。興産社は利子補給の特典を受ける保護会社となり、北海道庁の支援を受けながら、製藍事業を進めた。同二十八年には製藍高四万三千貫に達し、北海道藍は本場の阿波藍を圧迫するほどであった。しかし全国的な伝統的な製藍業が化学染料の合成藍に押されて衰退していく中で、明治三十年には事業の中止を余儀なくされていた。

現在、民芸ブームの中で伝統的な藍染めが見直され、壊滅状態にあった藍が復活しているが、北海道では板野郡川内村出身の篠原家が伊達市で今も藍づくりを続けている。

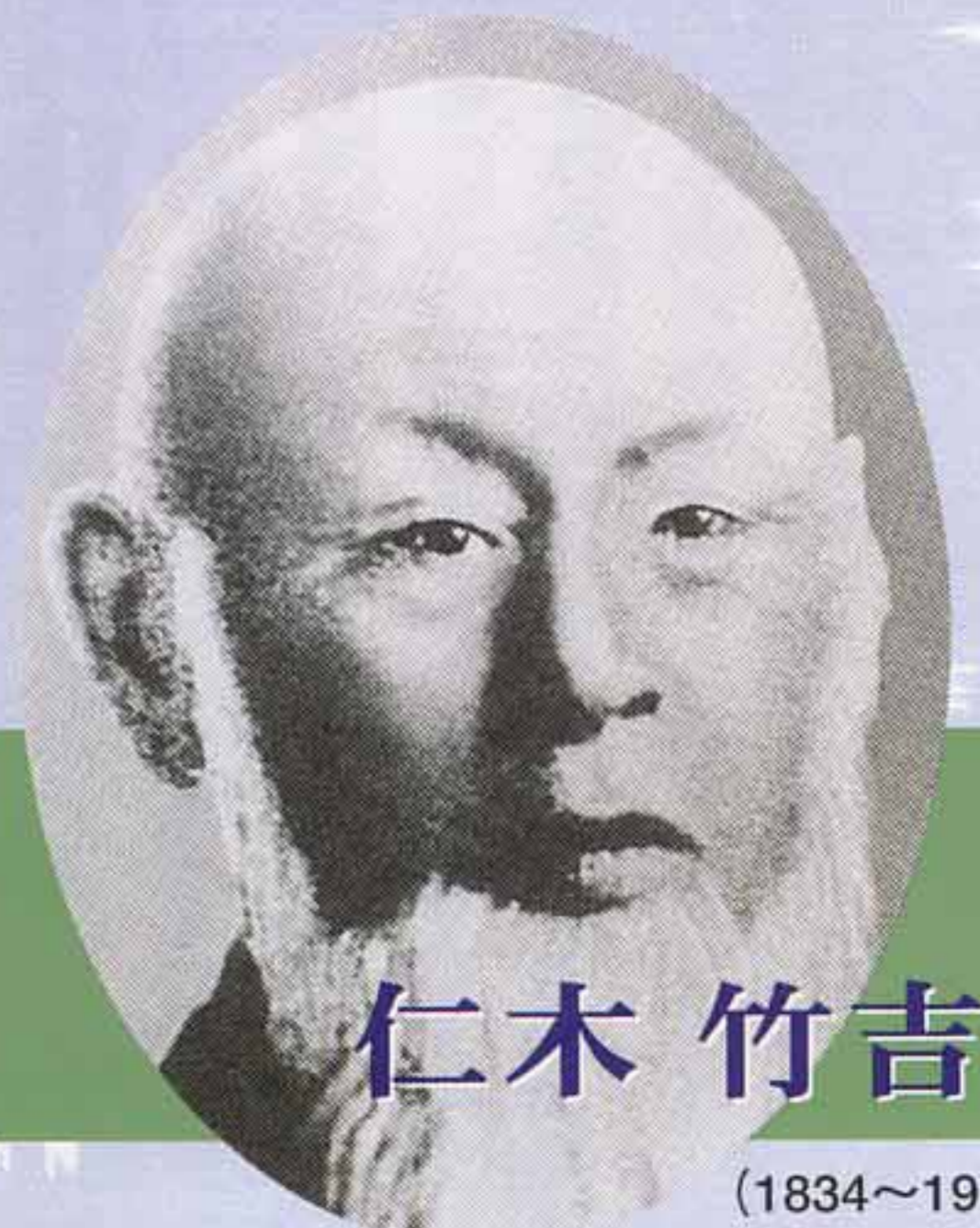
また現在の札幌市北区篠路町の「あいの里」は、興産社の藍を地名のゆかりとしている。徳島県人の移植した阿波藍が今に生きているのである。

阿波藍と北海道



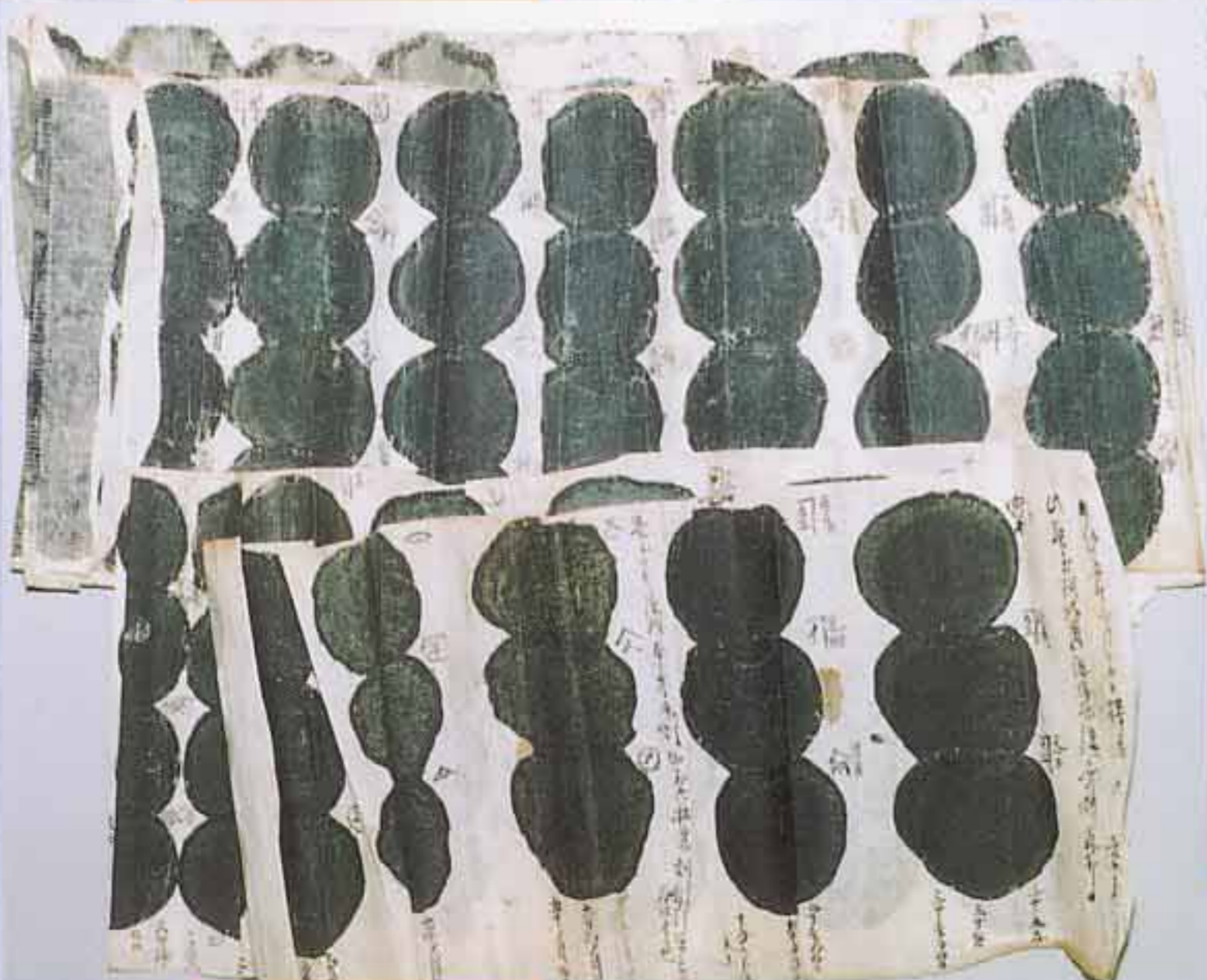
滝本五郎

(1836~1899)



仁木竹吉

(1834~1915)



北海道藍の「手板紙」明治13年(壮瞥町郷土史料館)

那賀郡北海道殖民同盟会と移住事業

明治二十四年以降徳島県は、全国の府県の中で常に十位前後を占めるような主要な北海道移住県となっていた。その要因には経済的な面もあるであろうが、県内の有力者による積極的な移住組織の創設や農場設置を挙げることができよう。

明治二十四年(一八九一)春、那賀郡の北海道開拓に関心を持つ有志が集まり「那賀郡北海道殖民同盟会」が組織された。殖民同盟会の目的については「近年徳島県人の北海道移住者は増加しているが、開拓の目的を達成している者は数少ない、これは状況を調査せず軽挙に移住するからである。有志の人これを嘆き移住民の不幸を救済するために殖民同盟会を組織する。」(徳島日々新聞)・明治二十四年十二月十三日・筆者意訳)とあり当時の無秩序な移住の状況を嘆き、組織として移住を奨励していくために会を組織したことを述べている。この会には、当時衆議院議員であった守野為五郎(現那賀川町)や県会議員で守野に代わって衆議院議員になる板東勘五郎(現羽ノ浦町)、県会議員で板東勘五郎(現羽ノ浦町)、長も務める小笠原鶴太郎(現羽ノ浦町)など那賀郡内の実力者十一人が名を連ねていた。



友成 士寿太郎
(1885~1918)

殖民同盟会で委員をしていた友成士寿太郎は、一念発起して羽ノ浦町役場助役の職を辞し三月に北海道開拓の状況調査に出発した。道内を広く踏査した上で、七月二十九日札幌から上川街道を北東へ十二里(約四十八キロ)石狩川沿いの石狩国樺戸郡月形村キウスナイ(黄白内)(現・浦

白町)に二百五十万二千二百七坪(約八〇三ヘクタール)の土地を貸し下げを受けることに成功した。

士寿太郎は、急いで徳島へ帰り那賀郡北海道殖民同盟会に状況を報告し、那賀郡の人々を中心に町村の役場等をまわって移住者を集めはじめた。また、那賀郡北海道殖民同盟会は明治二十四年十二月の新聞に数日間わたって大きな広告を掲載している。その広告には「明治二十五年から二ヶ年で二百戸の農民を移住させること」を目標に、「移住者には二度に分けて一万坪(約三・三ヘクタール)を配与し、成功した後、所有権を与えること」を約束している。また条件として、「渡航費及び移住後一ヶ年の衣食費に耐える資力のある者、目的を変えず当会の規則を厳守する者」としており、渡航費と生活費は自分で用意しなければならなかったことがわかる。この募集により明治二十五年四月には三十戸を集め北海道に旅立った。しかし現地の状況にそのうち十六戸が離散してしまっただけであった。

その後十四戸によって開拓は苦勞を伴いながらも進み、明治二十五年十二月には第二回、明治二十六年十二月には第三回の移住者募集のために士寿太郎は徳島に帰っている。二十六年には四十一戸二十七年には十三戸が新しく移住し、明治三十年には移住者は百七十一戸に達したとされている。殖民同盟会も活動は継続しており、二十六年二月・二十六年十二月にも新聞広告を掲載している。



守野 為五郎
(1851~1906)

また、有力な会員であった守野為五郎家には、明治二十八年二月の開墾地に関する報告書が残されており、二百五十万坪の内百二十七万坪を分与し、三十万坪は牧場に、二十万坪は防風林・薪炭林として残し、残地は七十三万坪余りになって開墾地では、大豆・小豆・粟・稲・黍・ソバ・タバコ・タマネギ・ジャガイモ・米などの産物が生産され、土木事業によって堤防や橋などの施設も整備された。

さらに守野家には、明治二十八年十二月に月形村内に作られた公立徳島尋常小学校に対して建築費を出したときの感謝状が残されている。徳島小学校は、明治二十八年に移住者数名が集まって寄付金を募り、二十四坪の校舎を建てたものが始まりで、故郷の名を取って徳島小学校と名づけられたとされている。守野家の感謝状もこの時のものだろう。

その後、明治三十三年に編纂された「北海道殖民状況報文」によれば、二十八年以降は新しい移住者に対して渡航費と生活費を貸し付ける制度ができ、二十九年以降には富山・香川・高知県の人々も移住してくることにになり、三十二年には月形村から分村した浦臼村に含まれることになり、水田の作付成功もあって順調に開拓が進んだ。三十三年の友成農場は二百二戸耕作面積七百七十一町歩(七七ヘクタール)からなり、うち四百七十町歩は百九戸の移住者に付与され、移住者の平均耕作面積は四町歩に達する成功を治めた。状況報文でも成績顕著と認めている。



板東 勘五郎
(1861~1918)

那賀郡北海道殖民同盟会の板東勘五郎はこのほかに、二十九年に石狩国空知郡栗沢村(現・栗沢町)、三十年十勝国中川郡蝶多村(現・池田町)、同じく三十年十勝国中川郡勇足村(現・本別

町)・小笠原鶴太郎も組合員で支配人は元那賀郡立江村長東条儀三郎・の利別農場など多くの民間農場を経営している。那賀郡北海道殖民同盟会が掲げた徳島県人を安定・安心して北海道へ移住させるといった目的は達せられたと言えるのではないだろうか。

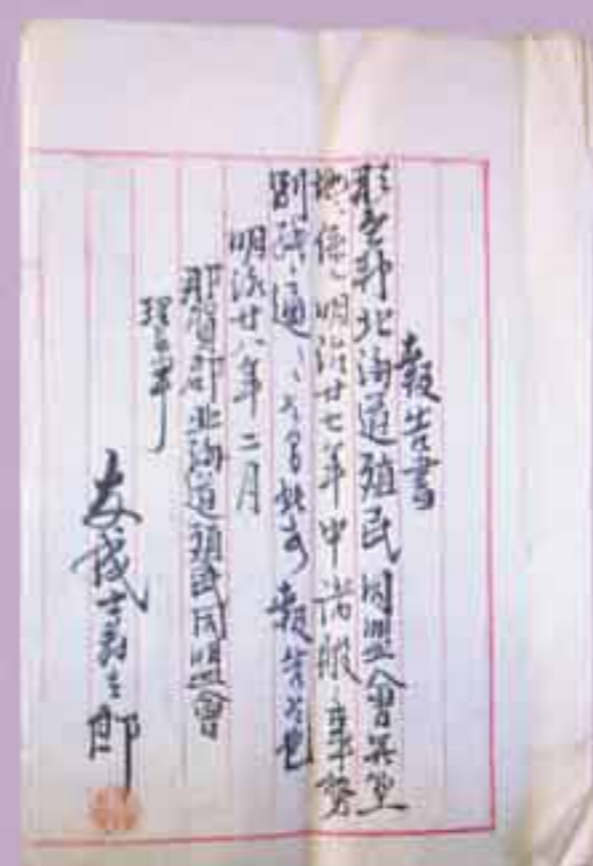
参考文献 中村英重「北海道移住の軌跡」

一九九八・一〇 河野常吉編「北海道殖民状況報文 石狩国」

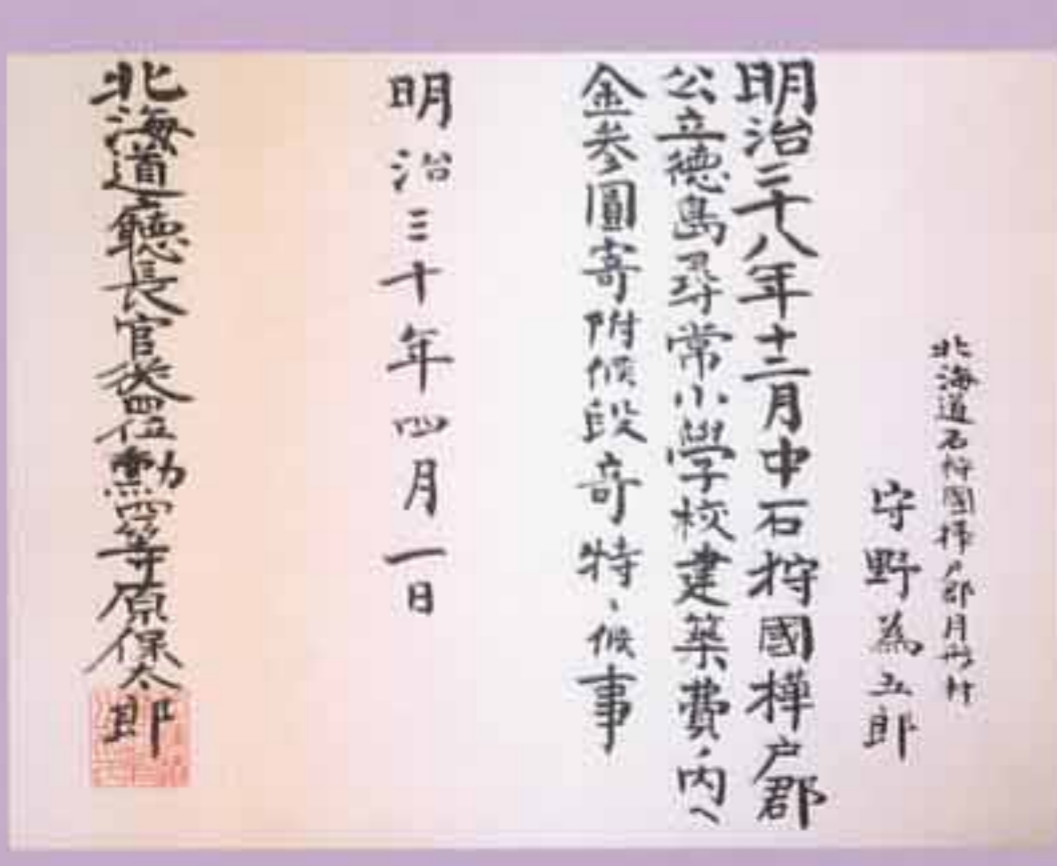
一九八七・二 友成家編「友成家三代 渡道百年のあゆみ」

一九九〇・一〇 勇足青年学級生編「勇足の歴史」

一九六三・二



友成士寿太郎の報告書



守野為五郎への感謝状



設立当時の蜂須賀農場(北海道大学・北方資料室蔵)

蜂須賀農場の設立

明治十九年「北海道土地払下規則」が公布されると、大土地所有の道が開かれ、華族や政商・官僚・豪農たちは競って大農場の開拓に乗り出した。

明治二十二年、公爵三條実美と侯爵蜂須賀茂韶・菊亭修季の三人は、協同して雨龍郡に一億五千万坪の大土地の貸付を依頼し許可された。

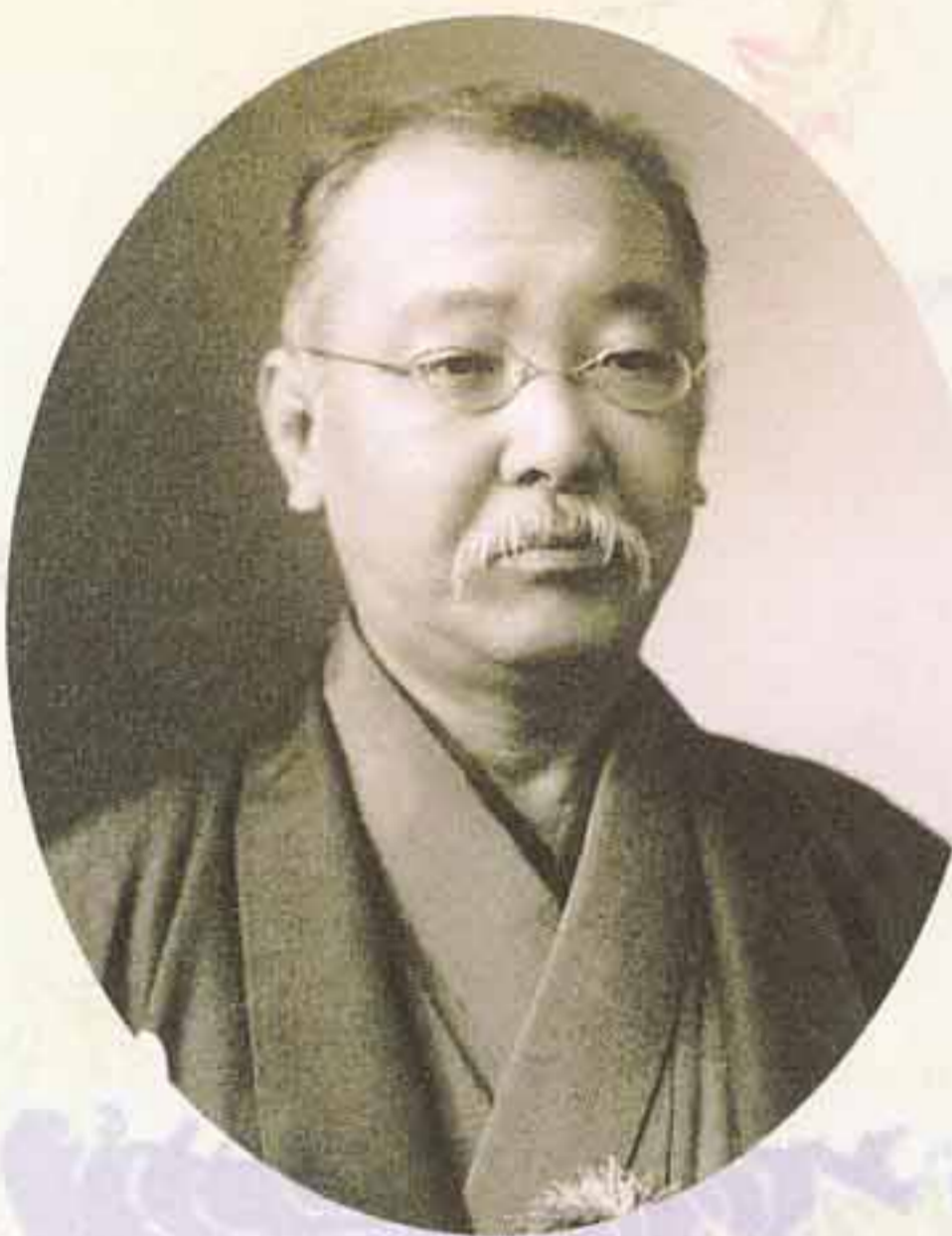
三条らは華族組合雨龍農場を設立して、アメリカ式の大農場経営による開墾を試みたが軌道に乗らず、明治二十四年三条の死を契機に翌年解散した。この後中心人物であった蜂須賀茂韶は、新たに約六千町歩(耕宅地約三千町、山林三千町)の官有未開地の貸し下げを受け、蜂須賀農場を開設した。はじめ直営方式をとっていたがうまく行かず、明治三十年には小作制に転換し、農場の小作人を徳島県をはじめ各地から募集した。

農場管理者には徳島出身の滝本五郎や長井新吉が就任し、阿波・淡路より小作人百二十戸が入植するなど、当初の農場の開墾や運営には徳島県人(阿波衆)の役割が大きかった。しかし明治三十年、四国からの北海道移民を乗せた依姫丸で虐待事件がおこったため、徳島からの移住者は激減、かわって当時最大の供給地であった富山県から募集し、次第に増加していった。

作物は、はじめ小豆・大豆・小麦などの雑穀や飼料が中心であったが、次第に米作に転換し、明治三十年代の後半には経営収支は黒字に転じて経営規模を拡大し日本における代表的な大農場にまで成長していった。

しかし、同時に小作料をめぐる問題も次第に表面化し、大正九年、蜂須賀農場で最初の紛争がおこったのははじめ、全国的な小作争議の激化にともない、一九三二年頃まで争議頻発した。

昭和二十二年、農地解放により、蜂須賀農場は解散し、現在にいたっている。



蜂須賀 茂韶
(1846~1918)



徳島より分霊された雨龍神社(蜂須賀家政を祭る)



蜂須賀農場で使用された印章(雨龍町役場)

蜂須賀家農場
開墾係
雨龍郡雨龍村
蜂須賀家農場
石狩國雨龍郡雨龍村
組合雨龍農場
雨龍郡雨龍村
蜂須賀家農場
組合雨龍農場
計之印
蜂須賀家農場

展示資料目録

表 題	作成年代	作 者	備 考
「北海道国郡図」 「北蝦夷新誌」 北蝦夷新誌原稿 「北門北進社則」 「千島義会規則」 「蝦夷風俗之図」	明治2年	松浦武四郎 岡本章庵 " " " 不詳	西野・多田家文書 徳島県立図書館蔵 " " " "
「現今北海道要覧」 「北海道移住案内」 " 「北海道移住案内」	明治13年 明治30年 明治32年 明治20年	村尾元長編 北海道庁 " "	西野・多田家文書 " " 個人蔵
「徳島県公布全書」 " " "	明治13年 明治14年 明治24年 明治36年	徳島県 " " "	徳島県総務県民課 " " "
「雨龍村勢一斑」	昭和10年	雨龍村	個人蔵
韋庵筆「萬人之敵」 日高之國新冠郡支配書 稲田家北海道移住関係文書	明治2年 明治3年	岡本章庵 太政官	徳島県立城南高校蔵 蜂須賀家文書 井上家文書
那賀郡北海道移住殖民 同盟会関係文書 ・報告書 ・守野為五郎宛感謝状 ・友成士寿太郎書簡	明治28年 明治30年	友成士寿太郎 " "	守野家文書 " "

※期間中展示資料を一部入れ替えることがあります。



開拓期の北海道原野
(北海道大学・北方資料室蔵)

第十七回資料紹介展
徳島県人の北海道移住

平成十二年二月二日発行

編集・発行 徳島県立文書館

〒770-1807 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八(六六八)三七〇〇

印刷 原田印刷出版株式会社

〒770-1593 徳島市西大工町四ノ五
電話 〇八八(六二二)二三五六